

図書館から拓く「知る自由」

聖学院大学総合図書館長 土方 透

「図書館の自由に関する宣言」(1954年採択、1979年改訂)は、日本国憲法を基盤に、国民の「知る自由」に対し、図書館の任務・責任を宣言したものである。しかし、ひとくちに「知る自由」と言っても、最近では「宣言」が予定していたものとは別の事態が生じている。



1. 知る自由 = 圧力からの自由

一般に、「知る自由」は「積極的自由」と「消極的自由」の二つから論ずることができよう。前者は、国などに対して情報の提供を求める権利であり、後者は、国民が国家の妨害を受けずに自由に情報を受取る権利である(cf. アイザイア・バーリン『二つの自由の概念』)。これは、端的に言えば、国家の「圧力」からの自由を意味する、いわば伝統的な理解である。この理解においては、圧力の意図や目的、それを行う主体、被る客体がはっきりしている。しかし、今日の「知る自由」をめぐる圧力は、そうした明示的かつ単線的なものにとどまらない、より錯綜した様相を呈している。以下、いくつかの例を挙げていく。

2. 「圧力」の諸様相

1) 直喩的圧力

共産主義のバイブルであるマルクス、エンゲルスの『共産党宣言』(*Manifest der Kommunistischen Partei* (初版) 1848)は、1871年のパリ・コミュンを見たマルクスが、翌年その標題を「理由」(第4版への序文)を付して『共

産主義者宣言』(*Das kommunistische Manifest* (第4版) 1872)と改題した。にもかかわらず同書は、我が国だけではなく、多くの国で第一版の題を付して出版されている。

学問上の議論は別にして、すくなくとも、本書はそのような書名を持つ書物として、つまり原著者の改題の意図が反映されないかたちで、読者に提供されている。原題と翻訳題との照合さえ行えば原典の意図を知ることができるとはいえ、それを行わないであろう大方の読者は、原典を「知る自由」から遠ざけられている。

2) 暗喩的圧力

ロシア民話「大きなかぶ」は、大きな収穫物を農民が単独で収穫することができず、動物の手まで借りて収穫を実現するという話である。この物語には、登場人物を変えさせるいくつかのヴァリエーションが存在する。たとえば動物に代わって、兵士、その上官、さらに支配者(王)の手まで借りて収穫を実現するという版が存在する。これは、当時の社会主義思想のもとで、集団労働と階級を超えた団結を民話レベルから浸透させることが目されたものと考えられる。

しかし、それがなされた政治的意図の如何にかかわらず、この物語は、ひとたびそれがそのようなものとして出版されれば、ロシアの童話として、多くの国で読まれることになる。それは、外国のものであること、童話であることなどから、「正本」との異同が問われる可能性は低い。つまりオリジナルが描こうとする世界との距離は意識されにくい。「知る自由」が妨げられているという事態そのものを知ることは難しい。

3) 深層構造への圧力

グリム童話に代表される採話が、(そのつどの)社会通念ないし道徳的配慮から改竄されていることはよく知られている。たとえば、「灰かぶり Aschenputtel」(シンデレラ)

のなかで、ガラスの靴を無理矢理履かせるシーンは穏便に書き換えられ、兄2匹の子豚を殺され、その復讐として狼を殺して食した「3匹の子豚」の物語は、難を逃れた2匹の子豚と反省した狼による共存という平和バージョンに書き換えられている。

この圧力は、ある意味で（「平和・共存」という）普遍的な価値に通じうることから、指摘されはしても問題とはなりにくい。しかし、文化人類学の成果は「未開社会」に通底する独自の秩序や構造を発見し、その構造こそ人間をその深層から律するものであることを明らかにした。今日における物語・神話の研究はそれゆえに意味がある。人間はその発生以来、こうした物語・神話とともに、「人間」として存在してきたのである。したがって、こうした改竄は、人間の根本に深層から（見えないかたちで）影響を及ぼすことが考えられる。仮に人間が、その根本において因果応報（「やったらやられる」）という深層構造に律せられているとしよう。さらに近代は、その構造のうえに法制度を成り立たせ、因果応報を、私怨による復讐ではなく、法による可罰という制度として展開しているとしよう。その場合、その深層構造に「現在のモラル」が無自覚に介入する（「やってもやられない」）ことによって生ずる結果については、いまだ証明はされていないが、深刻であることが予想される。これは、もはや「知る自由」の問題というより、その自由を行使する人間主体の存立構造に関わる事態である。

4) 情報過多という圧力

以上3つは、なんらかのかたちで情報の獲得が制限ないし制御されている例である。したがって、情報の獲得に対する障壁の突破が問題となる。しかし、その一方で、現代社会においては、情報の過多がのしかかってくる。情報の豊穡たる海のなかで、そのすべてを扱うことはできず、なんらかのかたちで取捨選択が余儀なくされる。「知る自由」の処理能力を超えた過多が、「知る自由」に圧力をかける。その過多のまえに、われわれは情報を獲得すると同時に、情報を排除しなくてはならない。判断可能なレベルにまで情報を限定していくことが、「知る自由」の可能条件となる。

この過多による圧力は、情報そのものの過多というだけでなく、その情報の取捨を行う基準の過多というかたちで、倍加される。すなわち、いくつもの基準がさまざまな理由と傍証を示しながら、名乗りを上げる。われわれは情報の取捨選択に先立って、その取捨選択を可能にする基準そのものを取捨選択しなくてはならない。

このように情報の過多は、知る自由そのものに対する困難を意味するだけでなく、「知る自由」を実行する基準そのものを知ることの困難を導くこととなる。情報の獲得に対する障壁の突破が問題となる先の例とは異なり、情報の過多が「知る自由」にもたらず圧力から逃れる手立ては、見えてこない。

3. 図書館の働き

以上のような状況下で、図書館がさまざまな圧力とその背景をそのつど明らかにし、「正しきもの」を提示することは不可能であるといつてよい。しかし図書館は、正しき情報へのアクセスやアプローチの可能性を示すことはできる。よく言われるリテラシーの提供である。それは、「内容」や「価値」の提示ではなく、「手続き」の提供であり、上述した、さまざまな圧力に抗することではなく、つねに他のヴァージョン、他の解釈を指し示すことである。テキストの改変・ヴァリエーションについては別のテキストを指し示し、選択の圧力については複数の選択の仕方を提示する。常なる別様性・比較可能性の提供であり、その不断の展開である。

4. 「知る自由」の現実化

「知る自由」とそれを取り巻く圧力をまえに、図書館の働きをこのように考えることは、ある意味で消極的なものと映るかもしれない。「宣言」で謳われている「知る自由」が確保されているか否か直接吟味することをせず、また「知る自由」の内容の確定に直裁に与することもないからである。

しかし、図書館がつねに別の可能性、複数の選択肢を提供し続けるのであれば、一方向に向かわされることのない多角的な判断が導かれうる。これは、確たる「自由」に至る道筋を示すものではないが、自由への接近のサポートであり、プロセスのなかで自由へ通じる途を指し示すものである。

「知る自由」に押し寄せるさまざまな問題点の波間をかいくぐりながら、さらに知る途を切り開いていく。結局、これが「知る自由」をめぐる入り組んだ諸状況をまえに、かかる自由をかりうじて実現しうるやり方ではないだろうか。図書館は、そうした途を提供できる機関であり、かつまたそうあるべきであろう。「知る自由」を保障し、守り抜くために、図書館から「知る自由」を拓くのである。

（ひじかた・とおる）

キャンパス FM と BCP —大学における事業継続計画の考え方—

大学行政管理学会ファシリティマネジメント研究会 世話人 尾崎 健夫

1. キャンパス FM

「企業・団体等が保有又は使用する全施設資産（土地、建物、構築物、什器など）及びそれらの利用環境を経営戦略的視点から総合的かつ統括的に企画、管理、活用する経営活動」（JFMAのHPより）をファシリティマネジメント（略して「FM」という。）という。2006年に大学行政管理学会ファシリティマネジメント研究会が設立され、キャンパスFMの概念が徐々に認知されてきている。その詳細については、大学行政管理学会ファシリティマネジメント研究会編「キャンパス再生のすすめ—これだけは知っておきたいキャンパスFM」（学校経理研究会発行）を参照していただきたい。

FMにかかわる業務は、近年アウトソーシングされてきている。その結果、業務が圧縮し改善されるケースもあるが、業務の境界が見えにくい場合もあり、想定外の対応で少なからず課題が生じている場合も見受けられる。アウトソーシングが進化したとしても、FMに何らかのかたちで関わる大学職員は存在する。FMの責任を担う者が、従来と同様にキャンパスFMの質を左右している。エフエム・パートナーズ・ジャパンのクレイグ・カックス氏は、FMに関わる者の心構えとして、

This is my building.

This is my problem.

This is my solution.

という自覚が極めて重要だと述べている。図書館の場合であれば、

This is my library.

と置き換えて、図書館員やそのFMに関わる方々が、施設の本質的な課題に真摯に向き合うことが第一歩なのではないだろうか。また、「失敗学」などで知られる畑村洋太郎氏は、その著書で「3つの現」すなわち、

現場、現物、現人

という視点が大切だとも述べている。昨今、さまざまな施設等に起こっているような事故を回避し、安全を確保するためには、机上の考え方やコンピュータに頼るだけでなく、現場とそれを取り巻く実際の状況を直接、把握しなければならぬ。



2. FMの品質と耐震性

防災やBCP（事業継続計画）の観点からは、FMの目標の一つである「品質」の確保が要になる。教育、研究施設の寿命は、他の用途の施設くらべて相対的に長い場合が多い。従って、その劣化や老朽化による安全性の低下を、未然に回避しなければならない。人間の健康診断と同様に、定期的な診断・点検が不可欠である。中長期修繕計画を作成しておき、診断・点検の結果、修繕や改修の時期を考慮すべきである。ハイインリッヒの法則では「1件の重大災害の陰には29件のかすり傷程度の軽災害があり、その陰には300件のケガではないが、ひやっとした体験がある。」とされている。施設等の不具合に早期に気づき、手立てを講じておけば重大災害の多くが、回避できるはずである。

国内では、二つの大震災を経て、建築物の耐震性は確保されつつあるといえるであろう。しかし、建築物の躯体ではなく非構造部材や什器などの耐震性、安全性については、どうだろうか。書棚、ガラスケース、ラック、コピー機、天井そのものと、そこからの吊るされた機器などは、大きな揺れが起きた場合に対して、人的な被害を及ぼさないような配慮が、十分に為されているといえるだろうか。その安全に対する責任は、不明確な場合も少なくなく、また誰かに任せただけで、それで良いと言い切れるものでもない。現場の状況を最もよく知る人間が、防災の知識と知恵を身につけ、事故を回避するための適切な配慮をしておかなければならないであろう。

3. 大学におけるBCPの考え方

寺田寅彦は、その著書「天災と国防」で、文明が進むほど災害が大きくなるという逆説的な考え方を示していた。これはジェラルド・J・S・ワイルドによるリスク・ホメオスタシス理論に通じることともいえる。言い替えれば、安全の手立てをすればするほど人間の意識は、むしろそれに安住してしまいがちで、その結果、事故や災害は、さほど減らないという考え方である。我々は、日頃から災害に対する十分な備えをしていなければならないのは当然だが、備えをしておいたから、もう安全だと安心しきらないことも、肝要なのである。

大学におけるBCPは、各大学の立地条件などによって大きく異なるはずだが、災害時に最も優先すべき事業や業務が何なのかを、常に適切に判断できるような体制を準備

しておくべきであろう。また、いざというときに参集できる教職員と、その人数を把握しておくことによって、大学としての緊急時の対応のしかたも、自ずと想定が可能になるであろう。そのうえで、初期、初動における的確な決断が最善の対応となるようにしたい。最悪の場合でも、相当の減災につながるのではないか。3.11での東京ディズニーランドでの来館者への的確な対応は、マスコミ

で大きく取り上げられた。

Safety, Courtesy, Show, Efficiency
が東京ディズニーランドでのポリシーだという。大学の場合では、防災 e-learning というシステムを使い始めている例もある。大学における BCP のあるべき姿としては

Safety, Learning, Imagination, Management
が、今後のキーワードになると言えるのではないだろうか。

『みんなで考える図書館の地震対策』を 読む・考える・行なう

十文字学園女子大学 石川 敬史

1. はじめに

阪神淡路大震災や東日本大震災における復旧・復興を踏まえ、図書館の地震対策に関する図書は既に数多く刊行されている。さらに、中沢孝之氏(群馬県・草津町立図書館)により、地震・危機管理に関するワークショップ方式の研修会も全国各地で行なわれている。災害対策のマニュアルは与えられるものではなく、一つ一つの現場における小文字での語りにより、誰を守り、何を守るのかを共に問い続けることによって創られていく。本講演とワークショップの目的は「読む・考える・行なう」とし、『みんなで考える図書館の地震対策』(日本図書館協会、2012; 以下、本書とする)を「読み」、ワークショップで「考え」、現場で「行なう」(実行する)ことにある。



2. 【読む】『みんなで考える図書館の地震対策』

本書は、地震対応マニュアルではなく、各館でマニュアルを創るための手引書であるため、現場で発生する可能性のある事象を小文字で掲載している。これらの内容は、①人(利用者、職員、自分自身)、②建物・設備、③資料の3点をどのように守り備えるかという視角により整理されている。そして、マニュアルの作成が目的になることなく、何のための備えなのか、何のためのマニュアルなのか、という「問い」にもつながるように留意されている。他方で、本書は公共図書館向けにデザインされている傾向もあるため、大学図書館関係者は下記の点も考える必要がある。

- ①大学の警備室等に頼ることなく、図書館単独での問題解決や情報収集への備え。
- ②学生の安全確保に留意しつつも、図書館が情報提供施設であることを念頭に置く。

- ③地域に位置する大学の職員という認識のもと、地域住民への対応と学生や地域住民の心のケア。

地震発生時には、時間的に切迫した状況下、何が発生しているのかつかめない不確実性の高い中で、さまざまな判断が求められる。訓練や演習を定期的に開催し、適切な対応ができるように備える必要がある。訓練には、避難訓練や消火訓練のような実技訓練のほかに、①講義(座学)、②討論型図上演習、③対応型図上演習などワークショップ型やシミュレーション型の訓練がある。こうした多様な方法の訓練を積み重ねながら、「その日」に備えることが重要である。

3. 【考える】ワークショップ

参加者が4人1組のグループになって実施したワークショップのテーマは、主に下記の3点である。

(1) 自己紹介・所属館の地震対策の現状と課題

自己紹介とともに、東日本大震災時の対応等を踏まえ、所属館における地震対応マニュアルの整備状況、館内の掲示をはじめとした図書館の地震対策と課題を紹介し合い、ワークシートへ記入した。

(2) 図書館内停電時の対応

図書館内が停電になった際、図書館内で発生する可能性がある事象を洗い出し、模造紙へ整理した。さらに、こうした事象に対して具体的にどのように対応するのかを考えた。これらも模造紙に整理し、発表を行なった。

(3) 地震発生時のシミュレーション

グループ内で図書館を運営していることを仮定し、部長やパート職員などの分担を決めた。また、配布した仮想の図書館フロア図に基づき、①館内の危険な場所、②安全な場所、③館外への避難経路を確認した。同時に、大学構内における図書館の位置や、地域で大学が立地してい

る場所や周辺の環境(河川、消防署、団地等)を確認した。そのうえで、地震発生直後、その2分後、3分後、5分後、6分後、8分後における館内の被害状況等を伝え、個々人が実際にどのように行動するのかを、その都度グループ内で出し合った。

4.【行なう】地震対策で行なうこと

これらのワークショップ(特にシミュレーション)において、良かった点や悪かった点(改善点)、気づいた点などを洗い出し、ワークシートへ記入した。そして、所属館でこれから地震対策として実際に「行なう」ことをワークシートへ整理し、グループ内で報告(宣言)した。

5. おわりに

危機は多様で、同じ危機は存在しないといえる。不確実

な状況下で対応することが迫られるため、できるだけ備えを共有しておく必要がある。大学という公共空間を踏まえながら、マニュアルや備えを図書館構成員全員で考えるプロセスが重要である。

■参考文献

- ・吉井博明、田中淳『災害危機管理論入門：防災危機管理担当者のための基礎講座』弘文堂、2008(シリーズ災害と社会)
- ・石井山竜平『東日本大震災と社会教育：3・11後の世界にむきあう学習を拓く』国土社、2012.
- ・た藤孔敬「復旧・復興出来たこと、出来なかったこと：挑戦・提案したいこと」『図書館界』64(2)、2012.7、p.82-89.

図書館と県民のつどい埼玉 2012 記録

「大学図書館のお宝お見せします」

2012年12月2日(日)、埼玉県図書館協会・埼玉県教育委員会主催の「図書館と県民のつどい埼玉 2012」が桶川市民ホール・さいたま文学館にて開催された。日曜日の開催は初の試みであったが、多くの来場者を得ることができた。加盟館からは11機関が参加。またSALAとしてのブース設置も行なわれた。

●埼玉県大学・短期大学図書館協議会(SALA) —— 「みなさんの学びを支援する ～SALAが紹介する埼玉の公開講座～」

SALAに加盟する各機関は、社会人入学や図書館の利用公開、公開講座やセミナーなど様々な「学ぶ機会」を提供し、市民、県民へ豊かな生活実現のためのサポートを行っている。今回は、公開講座等の情報を一覧にまとめた冊子「皆さんの学びを支援する～SALAが紹介する埼玉の公開講座～」を作成し、会場で配布を行った。

また新しくなったWebサイトや『図書館界』に掲載された活動に関する報告記事も掲示し、SALAの活動紹介の展示とした。

●跡見学園女子大学 —— 「3.11と新たな『戦後』」について

東日本大震災が発生してから、600日以上が経過した。家族についての意識の変化や、地域社会の変化、言葉の微妙な変化など震災後、少しずつなにかが変わってきている。「エネルギー」「コミュニティ」「3.11」などのキーワード

をたよりに図書を選び、変化を探ってみた。

今回は、本学園祭実行委員が行っている「フェニックス」というメッセージアートの実演もあわせて行った。

地震は去ったが、その後の社会変化が、あたかも先の世界大戦の戦後に戦前とは異なる社会ができたように、新たな「戦後」と感じられるのである。

●国立女性教育会館 —— 「NWECのあんな本、こんな本 ～男女共同参画を読む：絵本から専門書まで」

平成22年度から、大学図書館、女性関連施設、公共図書館、企業図書室等に、専門図書館の強みを活かして、様々なテーマの本をまとめて貸し出すサービスを全国展開している。

今回は「生き方、育児、家族、健康、働く女性」をテーマに、メンタルヘルス、アサーティブ・コミュニケーション、イクメン、親の介護などの本を絵本も含めて展示した。参加した大学や企業の方、高校図書館の司書さん、様々な方に手に取っていただいた。

●埼玉純真短期大学

「発達障害支援について考える」

保育・教育系単科の短期大学である本学は、「発達障害」に関連した文部科学省の委託事業に取り組んだことにより、地域との連携で発達相談を受けるなどの活動を展開している。そこで、大学での研究活動や授業が、どのように図書館と結びつき、学びを支援しているのかを紹介するため、「教職実践演習」の2クラスのゼミの学生が共通のテーマについて調べ、書籍や実験用具とともに展示し、学校関係者や関心のある方に広く見ていただいた。

大学での教育活動と図書館を繋げる“学び”こそが、埼玉純真短期大学のお宝である。

●芝浦工業大学

「Enjoy! Robot!!」

芝浦工業大学は「ロボットを楽しむ」をテーマに、ロボット2体（「かわさきロボット」「二足歩行ロボット」）と関連図書を展示した。ロボットと解説のパネルは、本学学生が製作したものである。一般的に目に触れる機会の少ない本格的なロボットは、多くの入場者に興味を持って見ていただいていた。

関連図書は、多くの入場者が「ロボットの楽しみ」を感じられるよう、専門書ではなく小説などの一般書を展示した。多くの人との交流のきっかけとなり、楽しんでいただくことができた。

●城西大学

「日本の伝統医学～暮らしに生かす漢方の知恵～」

本学展示では漢方医学に関する古書や調剤のための道具などを展示した。これらは本学薬学部において現代の医療、薬学、栄養学を学習する上で日本古来の漢方や医学書を学ぶ重要性和、建学の精神に結びつく学士力・人間力の涵養に資することを目的として蒐集している。展示では江戸時代に使われていた薬匙、薬籠などもご覧いただき、漢方について関心を深めていただけた。またデジタルアーカイブ・コレクションもご覧いただき、古書の新しい利用方法にも関心を持っていただけた。

●女子栄養大学

「画家の手遊び ～食べ物風景～」

野口義恵(1904-1980)は、女子美術学校(現・女子美術大学)に学び、挿絵画家として活躍した。戦後復刊した『栄養と料理』(女子栄養大学出版部)の表紙画を数年に亘り描き、また挿絵入り随筆の掲載もみられる。

寄贈された画帖『ぢきろう』には、菓子、野菜など四季折々

の食べ物の画に縁の人への感懐も添えられている。主に昭和10～50年代に描かれた。画帖装。全60帖。

『ぢきろう』の原本と複製本、挿絵図書や『栄養と料理』、関連所蔵図書、および本学展示開催時のポスターや郷土菓子の箱を展示し、画の世界を味わっていただいた。

●聖学院大学

「本からはじまったアメリカ奴隷解放運動

『アンクル・トムの小屋』発行160年を記念して

アメリカ奴隷解放運動の関連資料として、南北戦争のきっかけになったとも言われるストウ夫人著『Uncle Tom's Cabin』(1852年)の初版本と自筆の手紙を、またその発行から約100年後の公民権運動の指導者キング牧師とマルコムXに関する資料を映像も交えて展示した。

アメリカ大統領選挙が行なわれ、オバマ大統領が再選を果たした2012年、改めてアメリカにおける黒人の人種差別の実態と、それに対して戦ってきた人々を振り返る展示となった。

●東洋大学

「古典から妖怪まで ～創立125周年記念展示より～」

東洋大学は、2012年11月23日に創立125周年を迎え、同年5月30日から6月5日まで東洋大学創立125周年記念事業の一環として、東洋大学図書館特別展示を丸善丸の内本店4階ギャラリーで開催した。

今回は、この特別展示で紹介された貴重な資料の中から13点(『四聖像』、『妖怪絵巻』、『百人一首』(奈良絵本)、『小倉擬百人一首』、『雨やどり』他)を選び、各資料の象徴的な場面をパネルにしてキャプションを添え展示した。

古典から妖怪といった幅広いジャンルの資料を、多くの方に見学していただいた。

●文教大学

「冬来たりなば春遠からじ -シェリー・コレクション-

バイロン、キーツと同時代を生きたイギリスロマン派の詩人パーシー・ビッシュ・シェリー(Percy Bysshe Shelley, 1792-1822)。「冬来たりなば春遠からじ」の一文(シェリー作「西風に寄せる歌 - Ode to the West Wind -」の末句)や、夫人メアリー・シェリー作の小説『フランケンシュタイン』が世に知られている。生誕220年、没後190年の節目を迎えた今年、国内最大規模を誇る当館のコレクションから、ケルムスコット版の希少な詩集、シェリー自筆の献呈記があるものを含む初版本7点ほかを展示し、シェリーへの理解を深めていただいた。

●ものづくり大学

「国宝・重要文化財の調査報告書と学生の文化財調査」

つどい初参加の為、図書情報センターの概要紹介と夏季の緑のカーテンプロジェクトの紹介も行った(行田市緑のカーテンコンテスト(事業所の部)最優秀賞)。

今回の展示は、初代教授の故田中文男棟梁から受け継いだ文化財の調査報告書の紹介。それに建設学科の研究室での独自の文化財調査報告、更に卒業生の手になる「平三斗(ひらみつど)」の原寸模型、最新の「旧成田領に残る歴史遺産」書籍紹介まで、いにしえからの文化遺産を現代に語り継ぐ人材育成の思いの一端をお分かりいただきたいと企画した展示であった。



(左写真) 参加者

※埼玉県図書館協会 Web サイトにて報告書が掲載されています。

(<http://www.sailib.com/tudoi/>)

2013年度は、12月1日(日)の開催予定です。
参加機関を募集します。
ぜひご検討ください!

●立正大学

「居留地時代の築地と横浜」

明治期の外国人居留地として横浜や神戸は良く知られているが、東京の築地にも居留地があったことはあまり知られていない。現在、築地には外国人居留地だったことを示す痕跡はほとんど残っておらず、聖路加国際病院と近くに残る街灯1本が当時のなごりである。

幕末から明治期の築地は、慶應義塾大学、立教大学、青山学院大学、明治学院大学等多くの大学の発祥の地になっている。日本の近代化に大きな役割をはたした築地と横浜の居留地の様子を、当館が所蔵する当時の地図や錦絵などでご紹介した。

活動報告 2012

文教大学越谷図書館 鈴木 正紀

●第 25 回総会 (2012 年 5 月 29 日)

第 25 回総会を、聖学院大学において開催した。

平成 23 年度事業報告などの報告の後、(1) 平成 24 年度事業計画、(2) 平成 24 年度予算、(3) 平成 24 ~ 25 年度幹事館及び会計監査館の選出、などが協議され、いずれの案件も原案通り承認された。総会后、聖学院大学教授(図書館長)である土方透氏による記念講演「図書館から拓く世界—ポスト冷戦時代の自由、グローバリゼーション時代の自由」が行われた(内容については別掲)。参加数は 25 機関 40 名(他、委任状提出 22 機関)だった。終了後、意見交換会を行った。

●図書館と県民のつどい埼玉 2012 (2012 年 12 月 2 日)

さいたま文学館・桶川市民ホールを会場として開催した。SALA は恒例の「大学図書館のお宝、お見せします!」のタイトルで合同展示を行うとともに、各機関で実施している市民向け公開講座の情報を提供する冊子を作成し来場者に配布した。展示内容については別掲。

●論文投稿

SALA の活動を広報していくことの一環として、図書館関係雑誌に以下の記事を投稿した。

(1) 鈴木正紀「埼玉県大学・短期大学図書館協議会(SALA)の活動:地域における図書館活動の連携を目指して」『図書館界』64(3)、212-217(2012)

<http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xeonips/download.php?id=BKK0002150>

(参照 2013-02-27)

(2) 鈴木正紀・若生政江・菊池美紀・湊伸子・近藤秀二・肥土広康・柴原秀美「埼玉県大学・短期大学図書館協議会(SALA)のあゆみと今後の展開」(『大学図書館研究』)に投稿、掲載予定。2013年2月末現在)

●研修会 (2012 年 11 月 14 日)

第 24 回研修会を「みんなで考えよう! 図書館の防災」をテーマとして、文教大学で開催した。41 名の参加があっ

た(講師含む)。各氏の講演内容については別掲。終了後、講師を交え意見交換会を開催した。



●会報発行

SALA 会報第 21 号を 3 月に発行した。

●共同購入事業

昨年度から実施している、電子資料・物品の共同購入事業について、今年度は新たに 3 社が加わり、都合 7 社と取引をすることとなった。現在のところは物品の共同購入が取引のほとんどを占めている状態である。

●埼玉県地域共同リポジトリ SUCRA の運用

現在、12 機関が参加をして運用されている。より安定的な運用環境を実現するための検討を続けている。

●幹事会

幹事会は総会で選出された幹事館(14 機関)で構成し、当会の運営にあたっている。平成 24 年度は 4 回の幹事会を開催した(予定を含む)。役割分担については、当年度の事業課題(定例的なもの/当年度に特有のもの)を設定し、それらに対して幹事が分担して当たるという形をとっている。紙幅の都合で、分担の詳細は割愛する。

なお、幹事会メンバーは以下のとおりである。

代表幹事館：文教大学越谷図書館

幹事館：跡見学園女子大学新座図書館

国立女性教育会館女性教育情報センター

埼玉純真短期大学図書館

埼玉女子短期大学図書館

埼玉大学図書館

十文字学園女子大学図書・情報センター

淑徳大学みずほ台図書館

城西大学水田記念図書館

駿河台大学メディアセンター

聖学院大学総合図書館

大東文化大学 60 周年記念図書館

東洋大学附属図書館川越図書館

獨協大学図書館

なお、会計監査は埼玉学園大学情報メディアセンターが担当している。

 **株式会社三省堂書店**
北東京営業所


〒123-0872 足立区江北7-11-8
Tel 03-3896-7255 Fax 03-3896-6331


研究者・図書館・法人のお客様のためのオンラインストア


 **紀伊國屋書店 Book Web Pro**
<https://pro.kinokuniya.co.jp>

紀伊國屋書店 さいたま営業所 〒330-0061 さいたま市浦和区常盤 7-3-16 ソファ3階生命浦和ビル
Tel: (048)822-0775 Fax: (048)822-0765

 **ナレッジワーカー KNOWLEDGE WORKER**
丸巻の学術資料購買サービス

 **M** むすんで、ひろいで。
埼玉をもっと元気に!!
望月印刷は埼玉を支えています。

 **始動**
絆アバニュー

印刷のことなら、お気軽にお問い合わせ下さい。
複合印刷・マルチメディア
オンデマンド印刷 広告代理店
情報を最適なメディアで
 **望月印刷株式会社**
〒338-0007 さいたま市中央区円阿弥5-8-36
TEL 048 (840) 2112 FAX 048 (840) 2121
<http://www.avenue.co.jp/>

会報 第 21 号 2013 年 3 月 31 日発行

編集：埼玉女子短期大学図書館、獨協大学図書館

発行：埼玉県大学・短期大学図書館協議会 <http://www.sala.gr.jp/>

代表幹事館・事務局 〒343-8511 越谷市南荻島 3337

文教大学越谷図書館 ☎ 048-974-8811 内線 1707 FAX048-974-8040

印刷：望月印刷株式会社 〒338-0007 さいたま市中央区円阿弥 5-8-36 ☎ 048-840-2111 FAX048-840-2121